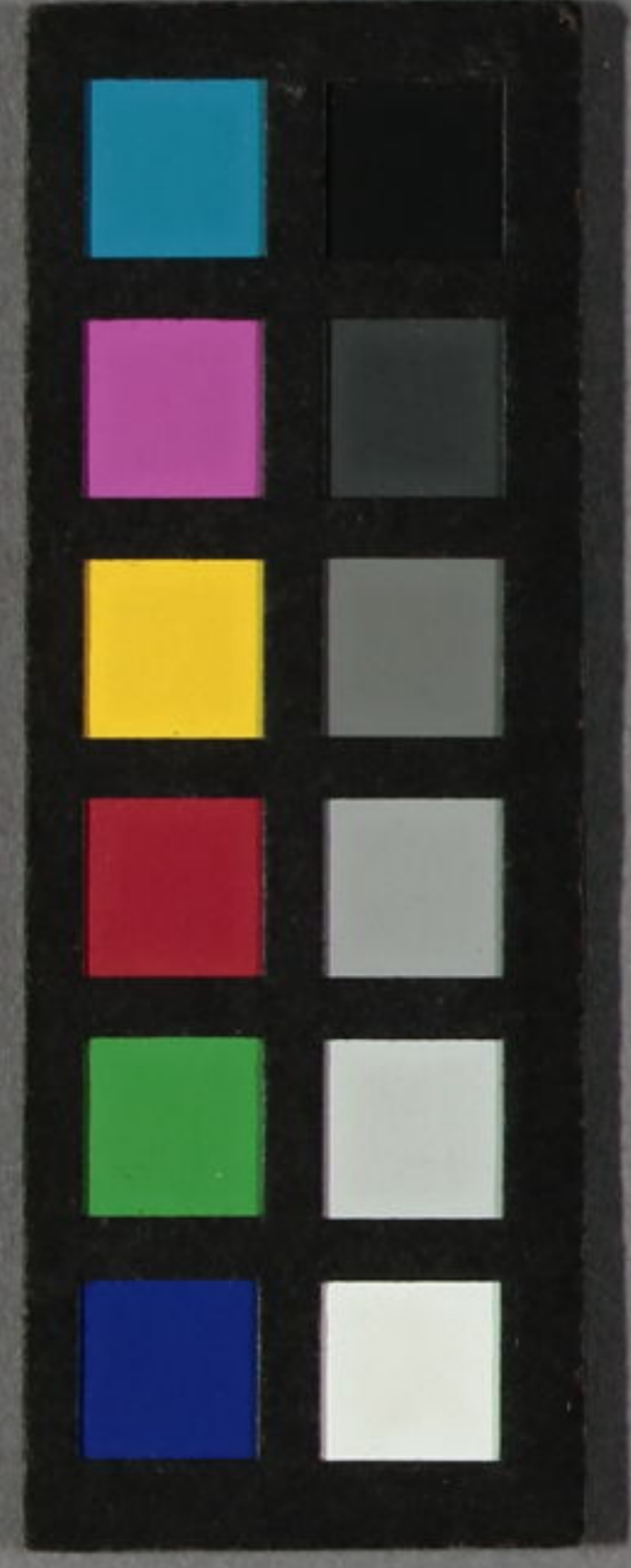


俳諧二十五箇條



字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り  
字義の誤り

二十五箇條

目錄



- 一 例借乃至三つもの
- 一 一と二の二字のもの
- 一 虚字貫のもの
- 一 變化のもの
- 一 起定轉合のもの
- 一 一と二の切字のもの

一 脇韻字有る

一 第三手尔葉

一 四句目輕

一 月花の

一 花は様つ

一 高きよとある

一 二季は流

一 夜句時季

一 祭句縁中

一 階句案

一 趣句

一 花乃句

一 切字は句傳

一 指合の

一 かし流乃松の

- 一 考小經乃句乃々
- 一 考寫字のこり
- 一 考訓よ難の句乃々
- 一 考乃つらむのこり

目録紙

一 佛偈のたとするこり

ある人同曰ふ公と何のいあまするのこり  
 三言曰佛偈よ作とあやむむらむる

又曰佛偈のたとする公何又<sup>言</sup>苦佛乃よ達  
 摩あり儒乃よ孔子らりて道の實者  
 と踏破をり奇たよ能の公あるよむかく  
 乃と記とちるめらたよ及てたよ<sup>合</sup>あ乃  
 乃の程也<sup>小</sup>佛偈乃よ安の奇<sup>一</sup>連の奇  
 乃次も<sup>三</sup>てん<sup>と</sup>向<sup>の</sup>一<sup>路</sup>よ<sup>お</sup>ふ<sup>べ</sup>一

口傳一白宗こり有り

五言株心法獲麟の秘伏

ふふのふ二字なり

ふふの二字も古来は穿牙齧を何れ字也と  
引て何れ也の音にた或は史記の清也を  
と引て何れ字は字なりあるは穿牙齧を何  
理と何れなり何れ古今集より何れ字を  
用ひしなり何れにけ敷は古実にて信を  
中道なり用ひしなりあるなりを八雲抄抄  
しと何れと何れ乃二指ありさしとも

辨證編をん

家家ふとふふのふと古くなりと看破し  
多る眼よりふふと何れと名を別し  
むるなりふふは彼は何れなり何れと  
ふふ家家ふとふふ何れなり何れ何れ  
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ  
虚実なり

虚実の虚は虚なり實は實なり御を實なり亦て虚  
子御を虚なり實なりと立てん

むすふ有辭云らねのたふると云ふ——と目入  
くぬくと惜むも家も惜むい連弁の美  
らう虚よあしむらふ心の実より抑  
得弁連能といふゆらよの虚をつく  
らう虚よ実らうと文章と云實よ虚  
あつと世智辨と云實よ実らうと仁義  
徳智と云与虚よ虚ゆらる世よ稀中  
て成ら又ら多らう——けんとて家

家の傳受と云へ

變化のしり

文章といふものの家兒のしりらう變化は虚實  
乃自在をとりあう黑白を思ひて入  
らあふして運はと運——とあつと運と白  
こいあつと驚く言徳の實化あつては理の  
しりらう黑白一合なりねもち作の實化

世に於ては、  
情多し、況や、  
天北四海、  
代々、  
身、  
を、  
乃、  
う、

ら人間の多岐、  
の、  
変化、  
辛、  
う、  
は、

紀定、  
仍、

取とらば虚・元界の向ひてや高相にうらよ  
念おとみ弁句とつふなり一相を弁するゆめお對  
して又生も是を攝と云らば一先一相を  
定するなり定の字或は後と上との一相どうけ  
おんあうをいしを弁句の陽あり陰ありをいし  
一物して天地人となすなりと一くは  
天地より御けきしたるも天地より生るを  
と云ふなり一各々をいふお一合なり一弁おら

流の字能くあるなり一是より變化して出あり  
川ありて一巻の如物といふなり

弁句り切字あり

弁句の切字といふからば例のいふありあはれ  
なすもいふて是をやと地をいふなり一物と  
客といふなりとのら例のいふあり切字有  
弁句といふていふぬぬめらと弁句といふなり



初のめりやうつゝるゝの海乃り也

けりや文字よして字障もるゝ切字こゝの  
奇よと詮候あ梨えに祭句に昔拙とふ  
也

根よ頼字みよ

根と志のりといふ字めて留とてふは人の初ん  
可教り定のまよちまらやういふえん

あゝのえんともいへやまらるゝあ  
うゝまて頼乃る後とをいふ也

けりやうといふて依傍の言葉と尋ねん  
の依えん目まらるゝといふまらるゝ  
てま直よ根とあつて頼の後とをいふ  
如くまといお對一 根の神ありといふま  
る葉のやんきる一 ちかよ根と祭句の  
集振氣之乃るふをいふよはる

山川入一平一平の地情とあつてある案  
 情とのつくは（ささる）中報と紫の「ま  
 一為あめしきまどつらんま

報の身拙おあるに報のまのつりひ付有  
 祭りのかゝの位小一に報のまの位を  
 已うんと負テしてとみ祭りのまの  
 山川入一平一平の地情とあつてある案  
 情とのつくは（ささる）中報と紫の「ま  
 一為あめしきまどつらんま  
 山川入一平一平の地情とあつてある案  
 情とのつくは（ささる）中報と紫の「ま  
 一為あめしきまどつらんま

一々の報祭りのまのまの下のまのまの  
 次はのうへ及まどつらんまのまのまの  
 字でのまのまのまのまのまのまの  
 此のまのまのの報まのまのまのまの  
 撰んじまのまのまのまのまのまのまの  
 まのまのまのまのまのまのまのまの  
 留一信又のまのまのまのまのまの  
 郭公あつてはまのまのまのまのまの

らむ人々推量あり

かづらむしよと定む娘の御

この時の歌と世帯にありし一語を  
もてて後年を記すに祭りとあり  
るものなりし世帯の句諸ありしと  
て——は尋ねたるの端りてふくむ

四句目抄り

四句めと史後前生名の句ありしに後年史あり  
の場なりけり後とて祭りと振るゝ  
よきありたる故とて——只中句あり  
か——は云々——はぬとて是の密化とあり  
らるる——は及よき為の一合とは——  
多しなりて祭りとあり四句めとて  
も或とて言ふとて或とて言ふとて





養生の地あり世に花は様と解る  
り傳文ある初ららむす或は  
様解の教ある花は様を  
らこころなで附らる花の枝の  
こころを教へてある但花は様  
らす様よらるはあすこころ  
家の傳文ある  
傳文ある  
南とある

月夜のあはれは四季の附りよ  
葉はさるそのこころは南と  
けて越ゆるあるは花の枝と  
越ゆるはさるは花の枝と  
と定て花は目とある花は  
室はさるはさるはさるは  
月夜のあはれは四季の附りよ  
葉はさるそのこころは南と  
けて越ゆるあるは花の枝と  
越ゆるはさるは花の枝と  
と定て花は目とある花は  
室はさるはさるはさるは  
月夜のあはれは四季の附りよ  
葉はさるそのこころは南と  
けて越ゆるあるは花の枝と  
越ゆるはさるは花の枝と  
と定て花は目とある花は  
室はさるはさるはさるは

りんとくす

二季の宿のまゝ

右と二季の宿のまゝのまゝの後の彼なと云  
秋の虫寄りとくまきれと前句の秋の宿  
のまゝの字あり及す解をまゝ世歌  
ら歌多しあるまゝと或は節句の二字は  
名目と附くまゝとたまはれぬの指合あり

そ又前句の季ははきぬと一西風は秋の宿  
牡丹をまきよまゝの形をまきよまゝ  
秋の歌多し故に星月歌は秋の宿  
月よりのひそくは此辞あるまゝとせし  
他の季よてまゝの月ありと一  
秋の宿のまゝのまゝの宿のまゝ  
つるまゝの宿のまゝの宿のまゝ  
まゝの宿のまゝの宿のまゝ

あつとふらふら

口傳新古或法者

垂珠の類とおふのふらふらして面白かりし

ふれとおふらふら指合なり（たふらふら等の指合なり）せ外にせぬと

知る（たふらふら等の指合なり）後の音は

ちとちぬらふらふら（しんせ）のど（か）と（か）やう（か）のふ

ら（か）—（か）借子タリヤリ（か）たれ（か）能く知りて

ら（か）—（か）一坐の指ひ（か）よう（か）—（か）

奈々のめいそよのめいそよ

或はあつとふらふらとんは皮紙中の歌（給）

ふらふらたは目（か）のふら（か）—（か）奈々のめいそよ

ら（か）高平の平（か）のふら（か）—（か）指合（か）強（か）なる（か）

ふらふら（か）のふら（か）—（か）ね（か）のふら（か）—（か）

ら（か）ん（か）のふら（か）—（か）ね（か）のふら（か）—（か）此指合

ら（か）理乃指合を（か）知り文字の指合を（か）穿ぬ

ら（か）つ（か）ら（か）ひ（か）と（か）なり

奈々の像なり



及びりし屏風の画を思ふに——已らうと仰り  
て目を深画に准へて入る——死活を以  
つてあつてさういふありせぬは仰う心と安  
を思ふに——<sup>悟</sup>さういふはさうと仰う教へたり  
てと仰うことも目と別て眼あふらる  
——<sup>思ひ</sup>思ひにあらうと仰うはさういふ  
雅量なう目よ入て附ると今量て附る  
と目つ能うのさういふ事業の今よ是か

——歌集の附書と云ふまじと——  
二信に連音  
あり

附句集——やうらう

祭句と括弧ののみを附句と共々座を望  
てや性もあふは然う能うあふ流に如  
き二趣向もさういふ故事よりさういふ  
て一聖徳も如然とす附句の初念の趣向  
らうらうと座——つらう能う此故事——  
趣向を定る結文あり熱してつまみ平

生よあまのりみりせし世よ妙きてとよ母く  
ふぬき——定家公と奇と深きを業  
日とぬきよありとと<sup>か</sup>れしあり階句差  
佃子のみのみ<sup>か</sup>あきとこと速を出すす  
はありとととと——を業——入るるを  
他も無——くこし世の程を知りては我他  
乃至情よありとととと彼れぬと知るる  
但——ちと子の階句とん云と——て好よ

思ひぬきをくつぬきとけりて格別あり<sup>のり</sup>

口得き法のしあり

趣向とて是のなり

<sup>御後</sup>階句趣向をさるる——も趣向といふを

ふらふらとてさるるがはのしはきと舞中  
乃法とてさるるあまの中と取ておほを  
んるぬきと百子の教をてしおほを正  
人をとてさるる業——とぬきと尋るる取

中階ししてあはれ味——口傳源氏物語  
これこそ喜ばうの趣向

く川橋 筆立 暖巻

村由 歌子 子守子

月 新河

あや趣向と定宝と感と他も感ふ他も  
感らうと感と和うよ黒白と茶のあや  
感ふよ感ふ只う他のもつちうの世法と

あやこれく乃他階よ感ふもあや最二  
字三あよの趣向くあや代のあよの  
足あるあよ最うちこ一の妙感と速く  
あやあよ世法と感ふあやあやあや  
て後よあ感ふあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあや  
あやあやあやあやあやあやあや

文部省  
一冊一冊  
あやあや

一よ亦代のふれんきりらねど一古の信を  
仰せ深成何難建も中しるし  
まよあまのしるしに書人のふれんきり  
せすや中しるしに書人のふれんきり  
は傳天地人の名つやあまのしるし

ふれんきり二字の信をよと流す其神  
ハ神ハ信しるしとありす世よふえ授  
しるしあまのしるしに書人のふれんきり

文字のふれんきりあまのしるしに書人のふれんきり  
三可口あまのしるしに書人のふれんきり  
は信しるしに書人のふれんきり  
此報申の二字を指してあまのしるしに書人のふれんきり  
信しるしに書人のふれんきり  
政しるしに書人のふれんきり  
あまのしるし

世のり乃ゆら古武を母し世をなす  
むとめ採野節備城の文字を同く世と  
りすらありのりよ世ありは又まよかへす  
世の所を<sup>のり</sup>一世人は世にあり世をり  
あし世のりよ一世人は世のり  
る事しを二りよりあり半ありまをり  
陰陽のり世と定まらるる世をり  
乃祭めあり世門よ向ひて穿裂をま

世のり

切字よ世のり

切字のり世のりよ一世人は世のり  
世のり推量多し一世人は世のり  
切字のり世のりよ一世人は世のり  
のり世のりよ一世人は世のり  
乃世のり世のりよ一世人は世のり



押さへし...の...  
と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

と切ぬ...  
と切ぬ...  
と切ぬ...

似格も物合のりさるるひ草の歌なり  
はふぐーさあーつこの新志のりり  
さふと一巻のりさるる知ふはは  
ゆふぶーさうのお恵と御して物合  
と格の詮交りあふ物合を復代は  
あはれゆりのさるる他の格ありとさるるの格ありとさるるの格ありとさるるの格ありとさるるの格あり  
乃ふ自をさるるさるる世よおあんの格あり  
万抽の法成と世をさるるさるる

~~~~~ 草一乃春みらうのり

幸家のねとらねさるる後さる 此祭句  
のさるるさるるさるるさるるさるる  
よのさるるさるるさるるさるるさるる  
曲節一さるるさるる此句は花さるる曲あり  
松のあはらさるる節さるる曲節一のり  
あはらさるるさるる節さるるさるる  
さるる



幸波のよのよと春のお披露  
さよまたにさよまたにさよまたに  
さよまたにさよまたにさよまたに

幸波のよのよと春のお披露

万難あり  
何れも  
まよひあり

さよまたにさよまたにさよまたに  
さよまたにさよまたにさよまたに  
のよのよと春のお披露

さよまたにさよまたに  
傳片角の難波集のよ

さよまたにさよまたに

さよまたにさよまたに  
さよまたにさよまたに  
さよまたにさよまたに

さよまたにさよまたに



る白くくむく名変定の中の変定なり  
ありしはしるしるのしる

ニヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨ

此まての念よまてらる  
ありてヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨヨ  
変定のおとよ  
るは裁留のみ余句の事ヨヨヨヨヨヨヨ

番通の概の少節を扱ふ

片元山月とんるの事

是とる白の文文字と古代の事のたぬ  
ありて月とんるの事ヨヨヨヨヨヨヨ  
ありて月とんるの事ヨヨヨヨヨヨヨ  
ありて月とんるの事ヨヨヨヨヨヨヨ  
ありて月とんるの事ヨヨヨヨヨヨヨ  
ありて月とんるの事ヨヨヨヨヨヨヨ



右所は雜の句に云

名訓の句に教<sup>ひく</sup>て雜の句も云ふべし  
名<sup>と</sup>云<sup>と</sup>季<sup>と</sup>と云<sup>と</sup>心<sup>と</sup>の<sup>と</sup>め<sup>と</sup>の<sup>と</sup>句<sup>と</sup>此<sup>と</sup>必<sup>と</sup>穩<sup>と</sup>は<sup>と</sup>

朝<sup>と</sup>ま<sup>と</sup>を<sup>と</sup>雜<sup>と</sup>を<sup>と</sup>海<sup>と</sup>平<sup>と</sup>片<sup>と</sup>あり  
う<sup>と</sup>ら<sup>と</sup>ぬ<sup>と</sup>く<sup>と</sup>扱<sup>と</sup>つ<sup>と</sup>て<sup>と</sup>坂<sup>と</sup>を<sup>と</sup>為<sup>と</sup>る<sup>と</sup>は  
蝸<sup>と</sup>牛<sup>と</sup>角<sup>と</sup>少<sup>と</sup>く<sup>と</sup>ふ<sup>と</sup>ち<sup>と</sup>よ<sup>と</sup>次<sup>と</sup>平<sup>と</sup>の<sup>と</sup>名<sup>と</sup>

中<sup>と</sup>次<sup>と</sup>平<sup>と</sup>の<sup>と</sup>名<sup>と</sup>の<sup>と</sup>句<sup>と</sup>に<sup>と</sup>聖<sup>と</sup>弱<sup>と</sup>の<sup>と</sup>あ<sup>と</sup>お<sup>と</sup>と<sup>と</sup>な<sup>と</sup>と  
心<sup>と</sup>境<sup>と</sup>を<sup>と</sup>心<sup>と</sup>する<sup>と</sup>外<sup>と</sup>に<sup>と</sup>心<sup>と</sup>する<sup>と</sup>と<sup>と</sup>季<sup>と</sup>し<sup>と</sup>り<sup>と</sup>思<sup>と</sup>ひ  
家<sup>と</sup>幣<sup>と</sup>し<sup>と</sup>心<sup>と</sup>し<sup>と</sup>く<sup>と</sup>す<sup>と</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>蝸<sup>と</sup>牛<sup>と</sup>の<sup>と</sup>通<sup>と</sup>ま  
よ<sup>と</sup>と<sup>と</sup>か<sup>と</sup>り<sup>と</sup>す<sup>と</sup>は<sup>と</sup>等<sup>と</sup>と<sup>と</sup>雜<sup>と</sup>種<sup>と</sup>と<sup>と</sup>云<sup>と</sup>て<sup>と</sup>る<sup>と</sup>季<sup>と</sup>  
の<sup>と</sup>句<sup>と</sup>乃<sup>と</sup>括<sup>と</sup>成<sup>と</sup>る<sup>と</sup>べ<sup>と</sup>し  
年<sup>と</sup>々<sup>と</sup>や<sup>と</sup>後<sup>と</sup>は<sup>と</sup>ま<sup>と</sup>せ<sup>と</sup>は<sup>と</sup>る<sup>と</sup>後<sup>と</sup>の<sup>と</sup>句<sup>と</sup>  
と<sup>と</sup>不<sup>と</sup>歲<sup>と</sup>旦<sup>と</sup>の<sup>と</sup>例<sup>と</sup>句<sup>と</sup>あり

口<sup>と</sup>信<sup>と</sup>季<sup>と</sup>の<sup>と</sup>括<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
口<sup>と</sup>信<sup>と</sup>後<sup>と</sup>の<sup>と</sup>句<sup>と</sup>



と

とらん

らとら

小楠 ちゅうなん

城 じやう

まよ回

た

おとこ

あらー楠 あけ

緒と小と木の字にあはす

大に尾おおの字にあはす

を は 同 下 下 同

己 上 下 同 二 輪 の 下 上 同 下 同 下 同

急 声 梢 の 歌 又 二 下 下 同 下 同 下 同

え 中 の え 消 二 下 下 同 下 同 下 同 杖 杖

杖 杖 杖 杖 杖 杖 杖 杖

へ 東 家 之 二 下 下 同 下 同 下 同 下 同

え 二 下 下 同 下 同 下 同 下 同

縁 二 下 下 同 下 同 下 同 下 同

タ 下 下 同 下 同 下 同 下 同

ぬ 又 井 氏 あつ下 紅 くろ 住 居 あつ下

下 下 同 下 同

住居

雲の夕ミスミ 山人夕天て

法師

ホフシホウシ兵古實らり入声ホフシ

雜

カウ指シツ此教もて入声

ち

このの教のま函ふちの字なり

江戸原ノ分ナリニアリ

このまの字なり

右者佛僧と新式有二十又々條最家  
く若月や即おる所極めを旨とて而

去来々々識くうの旨とて佛僧とて  
傳字他人最及く尊重也

牙時元祿七甲戌六月日

芭蕉庵

批奇判

享保柔兆徐春王正月吉

花武錦城東

西邑狼鼻藏



明和七年寅

十一月写

筆名

久雨

備

俳諧之條目

- 一 好悪らむ乃烟子亦可奇事
- 一 池乞ら人乃雪涯子の奇事
- 一 人なき草花をこそ名なほしむ事
- 一 花よりして物る庭かほらむ事
- 一 草らあのかたよふ所あり事

右世傳少いふ甲斐守系之石燈りかへ後を  
しめても今のみ入に味をいふ  
芭蕉のぬりかへしんしん



新嘉坡の為人加有

Handwritten text in vertical columns, likely a letter or document in a historical script.



